

# Alternative Systems Study Bulletin

第17巻第4号

(2009年11月3日)

---

## 若者の存在と意識——調査開始に当たって

- 1) 貧困研究会に参加して
- 2) 調査のキーワード
- 3) 研究紹介 宮本太郎『福祉政治』ノート

## 西嶋 彰さん聞き取り記録

## 後記

---

編集 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール [sakatake2000@yahoo.co.jp](mailto:sakatake2000@yahoo.co.jp)

会費 正会員 : 年間 1口 10万円

賛助会員 : 年間 1口 3万円

購読会員 : 年間 1口 1万円

振込先 口座名 : 資本論研究会

(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

## 若者の存在と意識——調査開始に当たって

### 1) 貧困研究会に参加して

10月17・8日に大阪市立大学で行われた、貧困研究会第二回研究大会に参加してきました。貧困研究会は、2007年12月に設立されて、雑誌『貧困研究』（明石書店）が三号まで発行されています。雑誌第一号が出たのは08年10月ですから、ちょうど聞き取り調査を始めた時期です。

雑誌を見る限りでは、貧困研究会はもちろん研究者中心の団体ですが、ホームレス支援の団体や、反貧困ネットワークで実践している人々とも結びついているようです。その意味では、職につけない人々の貧困の研究がメインで、ワーキングプアなどの「新しい貧困」の研究についてはこれからという感じです。

ホームレス支援の団体も、かつては革命運動の一翼という位置づけで活動していた人々が多かったのですが、国の支援策が打ち出されて以降は様変わりしているように思われます。NPO法人格などを取得して、住居の確保や生活保護の申請の支援、障害者支援などに加え、最近は就労支援活動にまでウイングを広げていっています。

反貧困ネットワークの活動も、弁護士中心の活動から、09年の日比谷派遣村を契機に連合などとの連携も進んでいるようです。

どうやら反貧困というテーマで、従来はバラバラであった団体間の連携が進んでいるようです。私たちが進めてきた社会的経済・社会的企業促進の活動も、このような全体の運動の一部として進んできたのだということが分かりました。新しい貧困と向き合うためには活動団体の横つなぎが絶対に必要ですから、この間の動きは新しい貧困と向き合い、これをなくしていく取り組みの入り口へと到達したということでしょうか。

共生型経済推進フォーラムがシンクタンクとして飛躍しようとするときに、これまでの横つなぎの活動のつなぎ目を、新しい貧困と向き合うことにおく必要があるように思いました。フルタイムの職についても貧困から抜けだせないという問題の解決は、社会全体の設計図を描きなおすことに基づくオルタナティブの提起としてしか現実性を持たないように思います。

ヨーロッパの場合は社会民主主義の政党が政権党につくことが稀ではなく、社会民主主義的施策が実施されている国や一時期導入された国がほとんどですが、新自由主義が登場して以降は、これに対する対抗施策は第三の道と呼ばれています。日本の場合は社会民主主義的施策は実施されずに今日まで来ていますが、日本的第三の道を、新しい貧困の解決という道筋に沿って解明していく必要があるように思います。

若者に対する聞き取り調査も、若者が新しい貧困の当事者であるということから、当事者の取り組みの可能性を探るといふところに置くことが必要かと思えます。「生きづらい社会」をどのように変えていくか、しばらくはこのテーマで調査して行きます。

### 2) 調査のキーワード

共生型経済推進フォーラムで若者の聞き取り調査を企画しています。まだどのように進めていくかについては明確ではないのですが、単なる意識調査ではなく、その存

在についても明らかにしたいと考えています。

キーワードは「個人化した時代の、新しい貧困の当事者としての若者」です。従来の日本の社会が認めていた貧困は、何らかの理由で就業できない人々のものでした。これに対して今日ではワーキングプアと呼ばれる、フルタイムで働いても貧困から抜けだせないような人々が1千万人を超え、また若者の失業も増えていて、従来の貧困に対応したセーフティネットでは全く対応できないことが判明してきています。新しい貧困とは、このようなフルタイムで働いても貧困から抜け出せないばかりか就労自体が不安定で、失業と隣り合わせであるようなリスクの大きい状態を指しています。

次に「個人化」ですが、これはベックが『リスク社会』で提起したもので、資本主義の発達による自由な個人の生成という問題からさらに進んで、1970年代後半から、ヨーロッパにおいて、労働市場における契約の主体としての個人が、家族や階級からも孤立化して行っている状態を指しています。ヨーロッパではこの頃から就業の不安定化と新しい貧困が見出されるようになり、様々な対応がなされてきています。

日本では階級の解体は進みましたが、家族は1990年代になっても若者が同居するという形で新しい貧困を隠蔽する役割を果たしてきていました。しかし今世紀に入ってから新自由主義的改革で、相対的貧困が日本の中流層にも波及し始め、また製造業の大企業までもが派遣労働者を使い捨てるようになって、2008年の年末から年始にかけての日比谷の派遣村で、やっど、新しい貧困は周知のものとなりました。

その後政権交代があり、生活第一を掲げた民主党が政権党となりましたが、新しい貧困への対応はまだ個別対応に留まっています。

調査のキーワードは、調査の目的とも関連しています。個人化した社会で、新しい貧困を解決する社会運動なり施策なりへと接近していきたいのです。理想的には調査それ自体が一つの社会運動として組織され、その運動自体が政策提言として機能していく、このようなことが実現できたらと考えています。

予備調査として、ベックの個人化については前号で紹介しました。今号では、日本の雇用レジームと福祉レジームについての宮本太郎の分析を紹介し、その上で、ニュースタート事務局関西代表の西嶋 彰氏の聞き取りを掲載します。

### 3) 研究紹介

#### 新しい貧困の出現と新しい施策 宮本太郎『福祉政治』ノート

##### \* 新しい貧困

従来、日本では、貧困とは何らかの事情で就業できない人々が陥る問題とみなされてきた。しかし、今日、フルタイムで働いているにもかかわらず、生活困難な人々の増大という現実が現れている。これは経済のグローバル化が進むにつれて先進国でもたらされてきた事態であり、新しい貧困と呼ばれている。日本ではこの新しい貧困は既に90年代初頭から見られるようになっていたが、若者の親世代との同居などによって隠されてきた。08年の世界金融恐慌で派遣労働者の首切りが進み、大勢の派遣労働者が退寮を迫られてホームレス生活を余儀なくされるという事態が生み出され、この事態に対して、年末の日比谷での年越派遣村の取組みがなされたことで、新しい貧困は周知のものとなるようになった。

宮本太郎『福祉政治』（有斐閣）での問題提起

\* 新しい貧困はなぜ生み出されたか

新しい貧困について、日本の雇用レジームの特徴から明らかにしたのが宮本太郎であった。

第一章 福祉レジームと雇用レジーム

「生活保障とは社会保障と雇用保障から成るが、日本の生活保障は社会保障への支出を抑制したまま、公共事業や業界保護による仕事の分配を通して成立していた。社会保障における所得の再配分に際しては、一貫した明示的なルールを示さざるをえない。これに対して仕事の分配は、裁量的な行政と政治家の口利きによって進められ、さまざまな利権を増殖させてきた。1980年代以後、都市の新中間層からの不信が強まると、政権党は率先して行政改革を進めることを約しつつ、その実、利益誘導を続けた。」(『福祉政治』v頁)

「福祉レジームとは、社会保障や福祉サービスにかかわるいくつかの制度が組み合わせられ、全体としてある特質をもつにいたった体制、という意味である。通常、福祉レジームは、公的な社会保障制度、すなわち社会保険、公的扶助、社会手当と公共サービスの制度が、私的保険、企業福祉や民間サービスなどの市場制度、家族やコミュニティなどの共同体的制度と組み合わせられてでき上がっている。」(13頁)

福祉国家や社会保障制度と言わずに福祉レジームと言うのは、公的な制度と、民間の制度や家族の役割との関係を重視するからだ。

\* エスピン・アンデルセンの三類型論

社会民主主義レジーム 「社会保障や福祉は、一部の困窮した人々のための特別なものとはされず、すべての市民が人生の折々で当然に利用するものと位置づけられる。こうした考え方を、一般に普遍主義という。」(16頁)

自由主義的レジーム 民間の福祉と公的扶助。

保守主義レジーム 職域や家族を基軸としたレジーム。

これを日本に適用すると、社会保険が職域ごとであり、家族の負担も大きい点で保守主義レジームに近いが、社会保障支出はこれよりも少なく自由主義レジームに近い。失業率から見れば、社会民主主義レジームに近い。この類型論に当てはめにくい。

アンデルセンの類型化は、政府、市場、家族・職域といった基本セクターから見ている。欧米に適合的な整理。また各国の福祉国家到達時点の相違を踏まえる必要がある。日本は70年代に到達し、すぐに石油ショックを迎えて財政の抑制が始まっている。

\* 雇用レジーム

日本的特質、大企業における長期雇用慣行と土建屋国家の仕組みを考慮して、雇用レジームを大企業の労使関係に留めず、中小零細企業の雇用を支える保護政策なども含めて考える。

「雇用レジームとは、具体的には労使関係と雇用保障制度、労働市場政策、経済政策や産業政策などが、雇用の維持・拡大をめぐるつくりだす連携関係を示すものである。」(23頁)

\* スウェーデンとの対比

スウェーデンは、零細企業保護はせずに労働市場での均等待遇と成長産業への労働力の補填という形。

日本は、零細企業の保護。自民党政治。

スウェーデンの均等待遇は、成長産業に剰余を生み、社会保険負担を企業に負わせられた。労働意欲の向上につながる。

\* 日本の雇用・福祉レジームの特徴

「年金や医療保険などが公務員、大企業、自営業といったように職域ごとに分立したかたちをとったことである。」(31頁)

「福祉レジームの規模は小さかった。日本では、生活保障の軸が雇用レジームに置かれたため、社会保障支出は抑制された。」(32頁)

日本の家族主義は男性稼ぎ主の生活保障で保たれたが、ドイツでは大きい福祉レジームによる家族手当が家族主義を支えた。

「その抑制された社会保障支出が人生後半の保障、すなわち年金、高齢者医療、遺族関連の支出に傾斜したことである。」(32頁)

「日本の『仕切られた生活保障』は、一面では『福祉より雇用』という考え方を先取りしていたが、多面ではいわば囲い込み社会を生み出してきた。」(34頁)

第二章 福祉政治をどうとらえるか

略

第三章 1960・70年代の福祉政治

1957年からの岸内閣で福祉国家の骨格が出来る。

1972年 田中角栄『日本列島改造論』

所得の再配分よりも工業の再配分を行う。この時期の公共投資は、GDPの伸びを上回る。

中小零細企業の保護制度 1973年大規模小売店舗法

1972年以降10年間で、大企業の被用者が、12万人増、中小企業人口が680万人増。1960年代半ばから、企業内福利厚生整備が進む。年功賃金と企業内福利厚生で家族を囲い込む。給与住宅(社宅)から持ち家へ。

1964年国際金属労連日本協議会(IMF・JC)

1975年労使協調による賃上げ自粛路線。

1973年福祉元年 高齢者福祉の支出増大。老人医療費の無償化。

日本の政党間の対立はイデオロギック的野党である社会党があつて、政策的な次元での対立は作り出されなかった。体制選択。

日本において現実的な社会民主主義が登場しなかった原因は、自民党が、中小企業、農業、自営業を繋ぎ止めていたことによる。

第四章 1980年代の福祉政治

「1980年代の日本では、行政改革を通して福祉レジームが削減され、税制改革によって税の再配分機能も弱められたが、雇用レジームによる『仕切られた生活保障』は堅持された。」(96頁)

日本的経営がもてはやされた時代

1970年代後半から、日本型福祉社会論 雇用レジームが福祉レジームの機能を吸収していることの正当化。福祉国家批判へと傾斜していく。

1986年前川レポート 貿易摩擦に対する対応。補助金行政と利権への批判への対応。

\* 消費税の導入の開始

1978年大平内閣準備、79年の選挙で敗北

1981年第二臨調答申 福祉レジームの削減の提案

これがすんなりと進んだのは、受益者層の組織化がなかったことによる。また雇用レジームによる支えも継続していた。

1988年消費税の導入

大企業労使連合 大企業の政策受益集団からの脱出、小さな政府、雇用の確保、1980年代後半から10年。

\* 見えない利益誘導へ

1984年「まちづくり特別対策事業」地方債による財源調達で自治体の単独事業を拡大しつつ、地方債の元利償還金の一部を交付税の基準財政需要額に算入して措置する、という方法」(122頁)

第三セクターを事業主体とする民活型事業。財政投融资 財政的腐食と利権の増殖 1990年代以降の「構造改革」へ

第五章 1990年代後半以降の福祉政治

1996年橋本内閣 橋本行革

1998年小淵内閣 財政構造改革法は廃棄される

2001年小泉内閣 橋本行革の継承

\* 「行き過ぎた平等社会」論

1998年の経済戦略会議「日本経済再生への戦略」

「規制・保護や横並び体質・護送船団方式に象徴される過度に平等・公平を重んじる日本型社会システムが公的部門の肥大化・非効率化や資源配分の歪みをもたらしている」「今こそ過度な規制・保護をベースとした行き過ぎた平等社会に決別」すべき。1990年代末から格差社会論の登場。

2006年小泉発言「格差が出ることを悪いとは思わない」

「個人間の所得格差のみならず、地域間の経済格差も指摘されてきている。」(136頁)

世論の揺らぎと言説政治 劇場型政治

\* 雇用レジームの揺らぎとその帰結

1995年日経連レポート『新時代の日本的経営』

「長期蓄積能力活用型」「高度専門能力活用型」「雇用柔軟型」

1999年労働者派遣法の改正

2004年製造業への派遣が認められる。

地方単独事業の縮小

\* 福祉レジームの再編(1)

「第一は、財政の逼迫を強調し、給付水準の抑制と自己負担の拡大を進める流れである。年金や医療をめぐる制度改革は、基本的にこうした流れの中で進められた。また生活保護や児童扶養手当をめぐっては、アメリカやイギリスの福祉改革の影響の下、公的福祉への依存を批判し、自立と自助を強調する傾向も強い。

第二に、より普遍主義的な制度への転換をめざす流れである。」(144頁)

ワークフェア

「ワークフェアとは、社会保障への『依存』を解消することを掲げて、福祉給付の見返りに就労を求める考え方である。」(149頁)

母子家庭の自立 児童扶養手当を巡って

ホームレスの自立支援

生活保護基準の見直し

障害者自立支援法

\* 福祉レジームの再編(2)

①普遍主義的改革の源流。第二臨調に対抗する厚生労働省一部の研究者 三浦文夫

1988年消費税導入時のゴールドプラン

②介護保険と社会福祉基礎構造改革

1997年介護保険法

2000年社会福祉基礎構造改革 「この流れは、その後、普遍主義的な政策という面と、自己負担の導入などにより低所得者を排除しかねない政策という面の間を揺れ動いている。」(157頁)

2003年障害者福祉の分野で支援費制度が導入される。・・・普遍主義的。

2006年障害者自立支援法 応益負担 排除機能

③男女共同参画

1996年男女共同参画2000年プラン

1999年男女共同参画基本法案制定

\* 福祉レジーム再編の隘路

「福祉レジームの再編には、見てきたように給付抑制とワークフェアの流れと、普遍主義的な福祉への流が共に見て取れる。こうした改革は、雇用レジームの生活保障機能が大きく後退する中で進行しており、このことが一方では福祉レジームの再編を迫ると同時に、他方ではいずれの再編戦略にも困難を生じさせている。」(161頁) 従来の社会保障制度の疲弊 厚生年金の被保険者の減少。国民年金の滞納率の上昇。健康保険では無職者が5割を超えた。

「結局のところ、雇用レジームの解体が進行する中では普遍主義的な改革も、その意図を貫徹することは困難になるのである。これまでの雇用レジーム中心の生活保障に条件づけられた社会保障の財政規模が前提とされれば、普遍主義的改革はなおのこと難しくなる。グローバル化と脱工業化の流れをふまえて、雇用レジームと福祉レジームそれぞれの再検討と、両者の関係の再構築を進めることが必要になっている。」(163~4頁)

終章 ライフ・ポリティクスの可能性

分断の政治

\* 労働市場の柔軟化

「①生涯教育や職業訓練の直接的な就労支援サービス、②保育や介護などの間接的な就労支援サービス、③還付付きの税額控除など低賃金を補う制度、あるいは教育などのために一時期労働市場を離れることを可能にする所得保障制度、④公共的な住宅政策や社会サービスなど生活のコストを引き下げる施策、⑤職域やライフスタイルにより中立的な(つまり転職や中途採用が損にならない)年金制度、などである。」(170~1頁)

\* 新しい生き難さ

「安定した所得につながる雇用と、それぞれの役割を全うできる家族が、人々の目標であった。・・・

ところが、いくつかの事情で状況は大きく変わってしまった。グローバルな市場経済の展開の中で、継続的で安定した雇用は望みえなくなった。高齢化の進展と女性の社会進出で家族のあり方は大きく変わった。そもそも、働き続けてめざすべき生活像や家族の意味合いが、人々にとって自明な事柄ではなくなってしまった。にもかかわらず、とくに先進工業国には、新興工業国に追いつかれ追いこされるという切迫感が満ち『生き残りをかけた競争』が煽られる。職場には過大なストレスがかかり、その影響が家族に浸透している。」(171~2頁)

\* 新しいリスク

大企業で精神を病む人々 介護などを抱えた家族 DV

「これまでの雇用や社会保障の制度が想定していなかった新しいリスクや生き難さが噴出している」(173頁)

\* ライフ・ポリティクス

『生活のあり方に関わる政治』とはいささか抽象的であるが、具体的には、①家族のあり方や男性と女性の社会的役割の再定義、②様々な体と心の弱まりについてのケア、③生活と両立しうる新しい働き方(ファミリー・フレンドリーあるいはサーク・ライフ・バランスと呼ばれる事柄)、④文化、宗教、性的志向性などともかかわる多様なライフ・スタイルの相互承認、などをめぐる政治ということができよう。(174頁) これまでは個人的な事柄と見られてきたが、雇用と家族の変容の中では公共的な問題となってきた。

\* 日本の雇用・福祉レジーム解体の方向(178頁)

①新保守主義 市場主義的改革を進めつつも、コミュニティの解体を伝統的な家族や規範、あるいはナショナリズムの再建で補おうとするもの。

②新自由主義 市場主義的改革を進めるが、そこから広がる個の自律を推奨する流れ。社会保障を家族単位から個人単位へ。

③第三の道、新社会民主主義 社会保障や福祉の強化を個の自律と結びつけようとする流れ。

「さまざまなケア、介護のニーズへの対応は、その性格上、行政主導で上から解決できることではない。当事者、家族などがやむにやまれず声を上げ、専門家、自助グループ、非営利組織(NPO)がこれを支え、行政、ケアワーカーなどが協力して解決の道を模索する以外ない事柄である。専門家や行政と当事者、家族などとの間には、明らかな情報の非対称性があり、関心のずれもある。人々は本音でぶつかりあうことを余儀なくされ、それぞれの問題に唯一の解決策などというものはない。」(182頁)

「つまり、ライフ・ポリティクスは、人々の参加保障のための政治でもあり、地域社会の活力や発展とも連繋した政治なのである。」(183頁)  
福祉国家から福祉ガバナンスへ

## 西嶋 彰さん聞き取り記録

西嶋 彰さん NPO 法人ニュースタート事務局関西代表

2009年10月23日実施 担当：境 毅 記録：濱西栄司

> 今回の調査の仮説づくりのためにお渡ししたメモについて検討するところから始めましょう。

80年代の若者像はプラスだったが、90年代からマイナスになってきたと言われてます。パラサイトシングル、フリーターといった言葉にしても、80年代は良い意味だったが、90年代に入って、経済的側面から、税金や年金を納められないのではないかと。最近では働けるのに働かない、というにニートへの批判がありました。道徳的観点からは自己愛や空虚、未熟さなどが言われた。そういう背景には、成熟社会になっ

て明るい未来というものがないこととか、環境問題でもこのままでは解決しそうにはないし、といったことがあります。他方ではIT技術の発達でコミュニケーションがオンライン化したことで、対人関係、他者関係のあり方が変化したと言われて、それらを総合して若者の内面の評価がなされてくる。

ところが今世紀に入って、とくに05年以降に変化があった。フルタイムで働いてもワーキングプア状態の人々が大勢いることが発見され、新しい貧困論があらわれてきた。そしてその当事者としての若者という位置づけが出てきた。日本の現状では働けない人への社会保障はあるが、フルタイムで働いて生活できない人への生活保証がない。そういう意味で若者は大変な状況におかれている、ということでかなり論調が変わってきている。それで、私が調査をする目的意識としては、新しい貧困の当事者としての若者は一体どのような存在なのか、それを探りたい。本当の当事者もいけば、当事者でなくリッチという人もいるかもしれないが。

80年代のプラスイメージというのは期待値があったということかな

> そうそう期待されていた。潜在能力が認められるという感じ。それからあとは、フリーターというのが非常に自由な生き方と考えられていたというところもある。

決して自由とは思わなかったが、「わけのわからん考え方するな」という意識はあった。

> 80年代といえば、あなたはそこそこ経営者で、ぼくなんかは、ニート状態でしたがバブルやなんかで、明るかった。生活水準でアメリカを超えちゃったというような。あの頃はまともに勤めなくても生きていけるというような幅があったような気がする。

僕らはそのころ底が抜けているなという感じはしていた。

ところでその80年代の若者、90年代の若者というけど、同じ若者でも違う人物だ。特に引きこもりを相手にしているが、80年代の若者はいまの若者の親だったりもするから。だから、私は多少、境さんの書いたプラスイメージという意味はわかるが、ほんとにプラスだったかは疑問符が付く。実はプラスであるようなある種の振る舞いをしたのは事実だが、実際には今世紀位に入って、子どもが成人しかけるという時代になって、実は80年代の若者が貧しかったのではないかなという気がしている。

> まあその意味で言ったら、80年代の若者にプラスイメージを与えたのはそのころの大人ですから、その大人がどうしようもないというところもあったのかもしれない。

それで現在の貧困の問題になりますが、1974年の石油危機でヨーロッパは、すでに今の日本のような状況で、ワークシェアをしたりして、大変な失業率だったが、日本はずっと輸出国でその後も成長して、90年代になってはじめて不況になるというタイムラグがある。それで、ベックという人の80年代西ドイツの新しい貧困と個人化について論じた『リスク社会論』をみたのですが、すでに日本と同じような状況が西ドイツで起こっている。その意味で日本の今起きている事態というのは理解しやすいという感じが一方です。他方で、当時のヨーロッパと違うのは投機ですね。経済のグローバリゼーション。金融のグローバル化が70~80年代のヨーロッパにはなかった。その点をどう考えるのか。またヨーロッパでは政権交代がたびたびあって、キリスト

教保守主義と社会民主主義（社会党・労働党）の交代があって、社会民主主義的な伝統も根付いているが、日本ではずっと自民党できて、新自由主義になったのがこの10年間。この10年間で社会ががたがたになり、そのなかで社会民主主義ではどうしようもない現状がある。

最近境さんそういわれるのだけど、社会民主主義を、信奉はしないが、その修正というのが、ある意味で生きているという感じがある。

>うん、それがヨーロッパの場合は、資本主義でも社会民主主義でもない第三の道という風に言われている。最初は、まやかしかんと思っていたが、大きな国家でもうまくいかない、市場に任せてもうまくいかない。その意味で第三の道とあっていて、いまは言い得て妙かなと。日本の民主党は第三の道に行かざるを得ない感じがして、いわゆる福祉国家でもなく、アメリカ的市場万能でもない、第三の道かなとおもって。そういう問題意識を若者はどう思うだろうか、というのが今回の問題意識。

もっと単純に言ったら、社会の設計を新しく考えなおさないといけない。ベーシックインカムといった話は、無条件の所得保障ですが、それは社会民主主義的ではないけど、社会民主主義でも市場万能でもうまくいかないこの社会を、とくにワーキングプアがでてきたようなこの社会では、にわかに現実味をもってきている感じがする。

民主党の政策でも農業の個別保障などいっているが、民主党は第三の道をいこうとしているのか？

>そこらへんはまだわからないが、日本で第三の道なんていっても評判が悪い。しかし民主党はイギリスをまねしているのだから、実質的には第三の道かなと思う。

この間の政策を見ていると、私なんかは当初は全然期待していなかったのだけど、ある意味でかなりラディカルな提案をしている。貧困からの脱出そのものを保障しているとはいえないけど、単に税率で税収を微修正する以上の政策を感じる。

>たぶん、世界、先進国の流れがそうになっているというのがあるから、民主党もそのあたりをちゃんとみているというのはある。テレビでみれば、民主党の議員が予算の事業仕訳をやっている。ああいうのを見たら、なんかすごいことやっているという感じがする。

ところで、若者と貧困の関係をどうされるかわからないが、私はまず今の若者、というより特にひきこもりについて、ひきこもりが貧困か、という疑問をもっている。それは話の前提にするようなことだけど、貧困には絶対的貧困と相対的貧困がある。生命維持の危機に瀕するような、食糧が手に入らないとか、かつては絶対的に貧困だった。今は、誤解を恐れつつ言うと、豊かだけど未来のない競争世界、と言っている。つまりかつてに比べると、はるかに豊かな社会だが、その中にももちろん貧困、相対的貧困はある。相対的貧困というのはある種の欲望、目標、希望そういうものが欲しても得られない状態のことを言うのだろうと思う。

ところがひきこもりなんかを見ていると、彼らははたして何かを欲しているのだろうか、とこの10年間ずっと疑問に思ってきた。ワーキングプアとかおっしゃって

れるが、もちろんひきこもりはそうではない。ひきこもりは、目標とか欲望とかすら失っている。ゆえに貧困ではない、という仮説を立てたい。

目標や希望や欲望を失っている、というのはその希望を奪い取られた、と思っている。それがひきこもりの原因だと私は言っている。社会環境ストレスとか社会的疎外論とか、ひきこもりの説明の前説として言っているのだけど。ひきこもりの親というのは、前説的に言っているときには、相対的な中間層でまともな貧乏人はいない。もちろんまともな金持もないが。まともな貧乏人はいないが、ひきこもりの親は全部中途半端な親で、希望や欲望のある種の飢餓意識を持って、そのために子どもたちを、競争社会の中に追い込んでいくのだけど、ちょうどその時に、グローバル化も含めて、特に製造業中心にして、企業の海外移転とか就職が極端に減った。冬の時代、氷河期とか言われる。今でも企業の海外進出は法人税が高かったからなんて言っている。もう一方で、私が例に挙げているのは、年金問題や地球環境問題なんですけど、我々の世代の大人が負の遺産を作って、今の若い者に押し付けている。だから今の若者たちには、欲望獲得装置としての職業も与えられていないし、未来も与えられていない。つまり希望を奪われている。希望がなければその欠乏としての貧困感もない。その結果、良くも悪くも彼らは貧困を意識しえない。そういう意識を持っている。

>ではそろそろ聞き取りを始めます。ひきこもりの原因、競争社会ということで、本人、社会、家族などをあげていますが、まず、原因をお伺いします。

こういう風にキーワードを並べられると、その通りですとしか言いようがないが、特に家族という面では、現代型の核家族社会、これが競争社会を加速させているようにおもう。決して農村型大家族が良かったとは言わないが、核家族の中で、家族相互にはすごい依存度が高いが、コミュニティや外部社会には戸を閉ざしている。それが意識の上では、競争をあおるということになっている。他人を、家族という共同体の中に入れない。他人というのはひょっとしたら親戚も含め、訪ねてくる人も含めて。今の9割くらいが家庭がそうだとはいえる。訪問してくるのは、朝の新聞配達から、セールスマン、宅配便、新興宗教セールスのたぐいだけ、全部、家の入口であって、家庭の中に入っていない。排除装置がついている。

だからひきこもりに引き付けて言うなら、ひきこもりの子どもはお父さんとお母さんと学校の先生くらいしか大人を知らない。昔なら近所のおばさんおじさんがいて子育てにも参加した。だから、スローガンとしてかかげている「家族を開く」という意味がある。それを、社会主義的な村落のような共同体、イスラエルのキブツにまでひろげるのかということにはまだ分からないが、確かに人類史の面から考えると、核家族的な、ファミリーに囲い込んだ、かたちでは子育てはできない。これは動物とかの自然社会を見ていてもいくつも事例がある。

>しかも父親はいないしね。

最近はお母もいない。学校という貨幣経済のなかでの有料育児所とTVがやっているだけです。だから学校というのは、そういった競争社会の中で、親のエゴイズムのな子ども愛や自己愛というのはあるので、なんとか自分の子どもを他人よりハッピーな生活を。結局は金銭であがなって、そういう差別教育をしているのが学校。これも仮説にすぎないが、ひきこもりにせよ登校拒否にせよ、そういう差別構造の底意地

の悪さに気がついた子どもほど、学校から遠ざかっていく、そういう気がしている。

だから、引きこもりも下手をすると同じようになっていくが、不登校をなくす会などというのは、せつかくそれに気づいた子どもを無理やり学校に行かせようとする犯罪的なもの。そういうところの親やあるいは学校の先生などがサポートをしているが、これはまったくエゴイストで、ある子どもがその就学年齢において登校拒否をしたら、その年齢の範囲だけ学校に戻そうとする。就学年齢を終えたらその運動そのものが崩壊する。

社会というのはこういう競争社会という概念の終着的な問題だから、私はまだ分かり切らないが、明らかにこの間、社会の側から新しく参入してくるメンバー、つまり若者に対して排除の意思が働いている。これも私がいつも言っていることだが、バブル崩壊のあと、日経連なんか、正社員を雇うなという通達を出したりして、その後、人件費が高いと言われた当時の大企業に対して、海外に工場を出すことを奨励して、海外に工場を出したら、彼らは日本の賃金水準の20分1くらいで雇える。その結果、日本の若者が企業社会に入っていくことを排除した。それは、産業社会の発展段階によるのだろうが、それが奴隷的労働であろうと、何であろうと、若者の社会参加を排除したというのは、かなり歴史的なことだと私は思っている。過去2-30年の歴史を振り返れば割と明らかだが、お父さん、お母さん、当然その中には大学の経済学部の先生もいたが、気がつかない。何を考えているのだろう。

>その辺は就労できたら何とか生活できたという日本のシステムがあって、基本的にみな就労できた時代に生きている人たちなので、出来ない場合の想像力が働かない。けっきょく、非正規とかパートとかは家計補助的賃金ということで、正規の半分とか3分の1、社会保険もないという状況があまり知られていない。一家を支えていけないといけな人がそういう業態につけば、生活できない、ということが理解されなかった。

いや、私は必ずしもそうとは考えない。さっきも言ったように、子どもが20代後半で就労できないということにはショックを受けているが、そのことには親はかなり早くから意識している。つまり、他の子どもよりもすぐれた立場において就労させたい。だからこそ、学校差別や進学競争がある。これをかなり意識している。しかし、わが子だけでなく、社会全体を覆い尽くそうとしていることに全然気づいていない。引きこもりの相談にくるが、それでも親の希望というのは引きこもりを直してほしい、直ってふたたび就労できるようにしてやってほしい、これです。私は引きこもりの一通りの回復のプロセスを語るが、息子さんは今の社会では、ネクタイを締めて背広を着て一流会社に復帰することはできない、と宣言する。

>たぶん、そこがわかってないのでしょうかね。

そこがわかっていないで、うちの子だけは引きこもりから復帰して一般社会に戻れるのだと幻想を持っているなら、引きこもりからしてなおせない。

>当事者にとって、親との関係は結構大きくなっているということですね。

どう説明したらいいか分からないが、大きいです。私なんかは、10年前に引きこも

り問題を扱った時、二神氏（NPO 法人ニュースタート事務局代表）の影響もあるが、最初は親なんて関係ないと考えていた。二神氏にすれば、親には手を引いてもらって金を出してもらえばいいのだと。技術論的にはそう。5年前くらいから、結局引きこもりの親は社会と共犯関係があって、子どもを引きこもりに追いやってきた。貧困論でいえば、本当に貧しいのは、心が貧しくて、飢餓感に襲われているのは親。その意味で親も被害者だけど、子どもにとっては自らを追い込んできた加害者は親なのだろうとおもっている。

>前から言ってきたが、引きこもるといのは世の中の秩序に対して、弓を引いているわけだから、ある意味で革命的と言えないことはない。ところが意識そのものは社会のそのときの意識を体現しているというところがある。

「一般的世界観の内面化」というのが普通の意識というのは、全くその通りだと思うが、内面化の構造が分かりにくい。ある種の、病気ではないと私は言っているけれど、ある種の精神的欠落感、正常な社会反応とは違うものがあって、やっぱり病気だなど。

>引きこもりの若者と話していても、個々の記憶力、判断力はあるが、頭の中でぐるぐるまわるだけで、自己対象化ができない。あれだといつまでたってもどうしようもない感じがする。ああいうのがやはり普通の精神状態なのですかね。

圧倒的に多いですね。ただそれが、何かの拍子に正常化してくる。その理由も分からない。最初親から相談を受けたときには、こっちもまったく循環に引き込まれてしまう。これは無理だと。それがどっかで、これは親でも我々でもない、これは本人なんだけど、どっかで抜け出してくる。我々はひとつひとつについて抜け道を探るといことはしてなくて、経験的に一般的に鍋の会というのに放りこんだら、自然に出口を見つけるだろうとおもっているが、それが見事に見つける。鍋の会もそうだし、NSP（訪問活動）もそう。NSP 担当者に聞いてみても、すごい発想法で啓示を与えたとかではない。

>ある意味でも引きこもりみたいな生活を長い間続ける中で形作られる精神状況。自分を正当化するために頭で考えて、

それが循環構造に陥っている時なんですね。これじゃとても直しようがないと思っ

ているときに、なんか天の上から、雲の上から落ちてくる。これは非科学的なことを言うつもりはないが、ある種の生命的能力かもしれない。

>大阪の、ニートひきこもりマッティングコミュニティの事業で3千万受けたLLPの人が、結局、参加してくる人はみな発達障害だという結論で、とくに30代でうちにくるのはみな発達障害だと。就労支援してみても、そういう病名をつけざるをえないような困難さがある。

まあしょうがないかもしれないね。統合失調症といっても、発達障害と言ってもようするに分からないといっているだけ。健常者、医者が分からないことが発達障害、

統合失調だといっているだけ。ただ発達障害の中にある種のグルーピングできる症状というのは、たしかにある。

>それでよくも何冊か発達障害の本を読んでみたが、小学校で習うことができないとかで、ニュースタートの寮に来ているのを見るとあまりいいのでは。

いや、小学校で習うことができないという人もいるだろうが、それとは違う発達障害というのもある。自閉症の一種なんだけど、アスペルガー症候群、高機能自閉障害というのですが、そういう意味で知能の発達はちゃんとあるのだが、アスペルガーについての私の解釈が一番正しいかはわからないが、非常に特定の関心のある領域についてはすごい理解と関心を示すが、ただそれについて他人がどう考えているかに非常に無頓着。これは多い。大多数の鍋の会の参加者がそれについてどんな理解もしていないのにそれにかかわらず、ものすごい専門的なことを話す。これがアスペルガー。多いですよ。最近、東京から大阪まで各駅を全部言える。そういうのは自分はアスペルガーだと自称しているようなものです。普通は知らない。時代背景が違うから何とも言えないが、歴代天皇を言える人は多かったが、これもアスペルガーだね。

>それが引きこもりの原因というのは別だろうとおもう。大阪の団体に来ているのは出歩ける人だけだから。

引きこもりの中に発達障害が結構あるというのは、私の理解では、アスペルガーの場合では一般的な知識の習得に向かわず、特殊な世界に逃げ込んでいる。

>そういう人たちは外で歩けても就労するのは大変。

ええそうなるでしょね。引きこもりの定義を、家から一步も出ない、それだけじゃなくて、私流の定義では、第2種、第3種引きこもりがいる。私の説だからどうこうっていうわけではないが、一般的には、異論はないようですね。家から平気で出歩けても、学校生活とか職業生活とか、いわゆる社会生活に参加できない人を社会的引きこもり。これはもう斎藤環さんの定義。社会生活を行う上で必要な対人関係や知識から逃げ込んでいる人たちを発達障害だと言っているような気がする。

>次に、ニュースタート10年の活動からということで、面談から見えてきたことについて伺います。

月によって変動はあるが、この1年はむしろ増えているかな。1年間に最低30件。昔はもっと多かった。一番ひどいときは、1日に4件。毎日ではないが。一人2時間やるので、脳梗塞になる前だったけど、へとへとになる。この10年間経過して、引きこもりもそろそろ種が尽きてくるのではないかという気がしていたが、あきらかに今年になって再上昇・増えてきている。これはワーキングプアとか派遣切りとか、むしろ親の過剰反応というか。早くわが子を引きこもりから救出しないとイケないと思った人たちが、我々の下に相談に来ている感じがする。

そのなかで、最近、直言曲言にも書いたが、年少化と年長化への両極分散がかなり顕著。私は引きこもりというのは、私自身の定義からも、基本的には15歳から20才

までに、発症すると考えてきた。発症するからと言って親がすぐ我々のところに連れてくるとは限らない。30代というのもいたのだけど。40代以降の引きこもりというのはいないと、基本的に考えてきた。15歳から25年間引きこもったら、40代になるのだけど、実際に我々が活動を始めたとき、実際に千葉であったことだけど、40歳の若者をひっぱりだして、その子の振る舞いを見ていると、引きこもりというのは若者のプライドを傷つけるような社会的ストレスだといってきたので、40代になったらプライドもなくなる。ただのおっさんだと。たとえば引きこもりの若い子は視線恐怖、他人から見られることに極端な忌避感がある。散髪に行かず、ぼうぼうの髪で家に引きこもっている。カーテン締めて雨戸締めてひきこもっている。40になるとそういう羞恥心もなくなってくる。昼間っから平気でぶらぶら歩いている。そういう仮説を持っているが、割と最近では、40歳すぎの引きこもりの話をよくきく。よくまあ親がそこまでホールドしていると思う。

もう一つは年少化。15歳というのは当然中学生。競争社会の入口。勉強の内容も競争の質も変わる。思春期になり、将来の自分のことを考え出す。そこからひきこもりがはじまるといってきたが、最近では、14歳や12歳から。引きこもりなのか単なる不登校なのか分からないが、これに対しては最近の私学ブームとか、中高一貫制ブームとか、小学校段階から親が競争社会に追い込んでいるせいだからだろうと考えている。私は一貫して否定しているのは、いじめというのは、引きこもりの原因じゃないと思ってきたが、現実にはいじめが引きこもりの原因と振り返って言う人は非常に多い。実際問題、過度な競争社会の一つの子どもたちの中でのストレス発散の一つの方法としていじめが利用されている気がする。

>この10年の面談のなかで親の状態の変化、顕著な変化は見られましたか？

基本的にはないですね。

>親に社会性がないというのは、10年間続いているということですかね。

社会性がないとは言いませんが、

>類型的に言えば

結局、中流意識というか、そこからはいあがろうと、少なくとも子どもにはそういう目には合わせたくないという、その防衛意識は例外なく強い。だから、怒られるかもしれないが、今の引きこもりの親たちの中心年齢はちょうど団塊の世代。極端に言えば、ほとんどが、全共闘の外巻き連中ばかり。極端に言えば。私なんかは隠そうとしないが、左翼イデオロギーについては非常によくわかっている。ただし、全共闘のバリケードには入らなかった連中ばかり。

>じゃあちょうどそういう状態からちゃんと就職して、70年80年の日本が経済競争で世界一となってきた時代を生きてきたわけですね。

そうですね。そう親に望まれ自分たちもやってきた。子どもには決して左翼にはならせない。



>その結果、子供がミニ全共闘のようになっているわけやね。大学封鎖じゃなくて、自己封鎖をしているのですね。意外とそこには思想的関連があるのかもしれないね。子どもは親と反対のことをするので、ああいうことやってはいけませんね、と言われて今全共闘はないので、自分独りでやる。

我々の若いころには家族帝国主義という言葉は多かった。そういう意味では引きこもりの若者は、親と抵抗するのに、帝国主義者と対峙するような感覚はありますね。

>それでこの間、若者の運動があまり日本では起こらないことについて疑問があった。よく考えると、持ち家政策、ローンを組んで家を買うということがあった。今の家族は一人っ子だから、結婚すれば一つ家が余るのだろうと友人が言っていたが、ローンを組んで家を持ったということ自体がある種債務奴隷。その会社を辞められないかたちになったということと、それと息子がワーキングプアになっても家にいれば何とか生活できる。パラサイトシングルは、90年代後半に首都圏で1000万人いると言われた。貧困が顕在化しない構造になっている。その意味で、当事者性の発揮もなかなか難しい。ヨーロッパだと成人になればすぐ自立する。家庭の外に出る。新しい貧困に直面して、とてもやっていけないということで所得保障や長期の失業手当が出てくるのだろうけど。その意味で日本の今の構造の中でどういう運動が出てくるのかは想像力が働かない。

債務奴隷というのは、積極的な意味か消極的な意味か。債務奴隷にしる、年金制度にしる、ある意味で、終身雇用制社会にしても、結局そういうものに縛りつけていくための制度だと思うが、それが結局その制度の仕組みが最長30年でしかなかったということだろうと。いま、そういう債務奴隷のような縛りから解放された、まさに何奴隷かわからないが、ひよっとしたら、何からも縛られていない、奴隷がぞろぞろと歩きだした。

>ある意味で奴隷以下の生活条件で、奴隷だと生存の保障はあるが、派遣に登録しただけで給与もでない。派遣労働者は経済的には奴隷以下の待遇だと思うが。

アメリカのサブプライムローンの問題だと、奴隷制度も、資本が生き延びる方策に使おうとしたが、その制度にも結局裏切られている。

>そういうことになった背景で、やはり投機で資本が動くようになったのは一つ重要だと思う。次に、寮を開いて10年近くになるが、寮生の変化はどうですか

親たちは10年前からあいかわらず、中流貧乏人やっているように見えるが、引きこもり自体は、個人の歴史とグループの歴史はちがうのだろうけど、かなり社会的時流に対応してくる。特にエゴイスティックな習性というのは露骨になっている。われわれのほうも、その習性に敏感になっているからかもしれないが。

私が、数年前から、引きこもりはケチである、という言い方をしているが寮費は決して安いとは言えない水準だが貧乏連中よりも、金持っとるやろうという人ほどそれを出すのを惜しがるといふ傾向はある。それは別として子どもの側から、親は思っ

いても口に出さないのだろうけど、子どもの側から高いという不満もある。この不満に対して、私ももう少しぬくもりのあるサービスを提供できないかとスタッフとも話しているが、それが期待できない場合は、若者は自助努力でそれを回収しようとする。

毎日3食は提供できないので、夜は夕食会やコモンズでという形でやっているが、朝昼は生活寮にコメの買い置きや牛乳が常備していて、基本的には自分で食べなさいということになっている。自主調理しても外食してもいい。そういう許容幅を設けている。たとえば1年か2年たつて退寮前になると、普通のサラリーマンがやるような外食では考えられないような贅沢をして、金を回収しようとする。金銭感覚については親よりも子どもの方が発達している。私が、ケチだというのは、金銭感覚がないからケチだと言ってきたが、実際には金銭感覚がないといえるかどうか。そこまで考えるか、と私は自分に対して疑問におもうことだけど、例えば寮で壁を叩いて穴開ける子はいつもいるが、この子らは壁に穴を開けることによって寮に修理代をと負担させようとしているのではないかと。極端だが、最近では、そういうことも感じるようになっている。

>引きこもっていた人たちのその後は、どの程度追跡できていますか。

追跡はほとんどしていない。ただ、退寮後、親元に帰るのではなく、高槻市内、この近辺に一人住まいをしている子はかなりいる。その子らの動静は追跡しなくても耳に入ってくる。あまり立派なことは報告できないが、一人暮らしをしてアルバイトをしながら、という人は何十人もいる。これは私がさっきも言ったように、正社員になる、というのは、もちろん、親が株式会社をやっているところに就職すれば正社員かもしれないが、世間でいう正社員というのは、いないと思います。むしろ、ニューススタート事務局そのものでNPOの正職員になっている人もいるが、その人たちほど安定している人は少ないだろう。

この辺は、どう表現したらいいかわからないが、基本的には、例えば高校中退して大学受験もできずにその辺で引きこもっている子がどうしたらいいのだろうと親が相談に来る。内心は引きこもりから回復させて大学に行かせたいという気持ちはある。最初、10年前はとんでもないこと考えるなど面罵したが、最近はそういうのもありうるかもしれないなど。現に高校中退してウチに入ってきて、東京の三流大学に行った子が今年の春に阪大の大学院にいたり、あるいは豊橋から来ていて、もともと京大を目指していたが学部落ちて名大に受かって中退をしてうちの寮に来ていて、今年の春に阪大に入った。それを私は半分自慢げに、半分親に希望を持たせるために言っているが、果たしてこれをどういう風に言ったらいいの、か、と思っている。いずれにしろ引きこもりの真っ最中というのは、一流大学だろうが三流大学だろうが、ただの運転免許だろうが、引きこもりには集中力がなく、あらゆる試験というのが無理。その状態を脱して、正常に、さっきの、最初の貧困論でいえば、希望というのを持つことができればそれはどんな希望もかなえられる。それは言えると思う。

>もともと引きこもりをなくすために活動するといっていたが、引きこもりのない社会のイメージについてはいかがですか。

まったくそのとおりですね。私自身は、これは別に引きこもりに限定しないが、そういう社会イメージにどう到達しようかしか関心がなく、まさか個別の引きこもりの

救済の運動なんかするつもりはなかったのだが、現実には、100人近くの親に囲まれて、なんやこんな簡単やんか、と思ったのがその最初だが、本当は引きこもりを助けるのではなく、ひきこもりのない社会を考えるのが私の考え。

じゃ、引きこもりのない社会というと、一つは引きこもりの子どもがどういう理由で引きこもっているのかを考えるのと同じことだが、結局、若者が学校参加を通して社会参加の準備をしているがその出口のところ扉をピシャッと締めているというのがイメージ。ただずるがしこい子どもたちは抜け道も知っていて抜け出していくのだけど。決して親がお金を払ったり、工夫をしたりして中高一貫校に行かせるということではなくて、当然ながら若者に対して社会に入っていく入口を開けていく。単純に言うとそれだけです。

語弊があるかもしれないが、例えばそれこそ貧しい国だったら、入口を開けたり閉めたりして調整していると思う。日本でも、この間、私はいくつか見てきたし、当然ながら私らの時は大学進学は10%台だったし、1975年に専門学校法というのができて、高等専門学校というのができるが、その前後の進学状況をグラフでとってみると、それまで一直線に上がってきたが、法律ができて、グラフが横ばいになる。文部省は、直接には文部省だが、結局は厚生省も含めた政策的な調整だった。別な意味では若者に2年間の徴兵義務を負わせている韓国も労働力調節だと思うが、それも含めて若者たちが社会参加する年齢にあつては、何らかの門戸を開けておかななくてはいけない。それをピシャッと締めている。非常に犯罪的なことだと思う。

かつてその、阪神大震災の時のボランティアの問題などで、いろいろ私も語ってきたが、今は社会的なボランティアの制度を用意したら、喜んで逃げていくのはいっぱいいるね。もっとも、ボランティアやったらワーキングプアにならなくて済むとか、履歴書の穴がうずまるとかそう考える奴はおぞましいけどね。

>引きこもりのない社会に向けてのアピールとかをやっているという計画は。

難しいなあ。貧困論そのものが私にとって非常に難しい。たとえばここでもいくつか問題にしたように、かつてはもちろん私もパラサイトシングルなど否定する立場だったのだけど、今はわからない。当然、貧困論の範疇のなかで、私は湯浅誠君なんかは非常に信用しているが、湯浅誠というのはかつて横に座ってしゃべっていたのだけど、あんなにしっかりしたやつとは思わなかったけどね。ただいまのワーキングプア論のように実態告発するようだけでは、次の社会イメージはできていないのだろう。半農半Xというのでもかっこよすぎるし。

>セーフティネットとか考えると、社会改良的になってしまうのね。でもそういうところにどうやったら持っていけるかなという問題なのですが、当事者が声をあげて、ということになりにくい問題ですよ。

境さんがさっき聞かれたように、ニュースタートの寮を出てどういうアクションをしているかという点、もちろんアルバイトなどはしているのだけど、本当の意味でのプラスイメージというのはない。生活保護なんかについてのイメージは、ある種の福祉社会論というか、民主政権のせいかしらないが、平気で考えているのはいっぱいいる。親もそう。生活保護。障害者年金。まあ自立支援法もそうかもしれないと思ってるが、これはあまり引きこもりのない社会というイメージではないですね。

平気で右翼的なことを言うということを経さんおっしゃったけれど、まさに状況をひっくり返すには、丸山政男をひっぱりたいという志向が出てくるのだろうと。

>下山 保さんが雑誌『情況』で、ワーキングプアが4人に1人となっているなら、役所を作れ、非正規省などを作って対策を作るべきだといっているが、意外とそのレベルの問題かもしれない。国政レベルで考えて、新しいセーフティネットはどうなるかなどを考えたとき、個々の当事者にはとてもできないので、上からそういうものを考える必要があるかもしれない。

欧州のことを話されたが、依然として、引きこもり問題は東洋の片隅の日本固有の問題のようですね。ニートという問題も含めて、若者問題というのがどうシフトしていくのかわからない。引きこもりも含めた、社会の現状として若者自身が認めていっちゃうのかなと。

>まあ、日本の場合、親と同居しているというのが大きいでしょうね。子どもが大人になっても。

そういう意味ではローンの奴隷、債務奴隷というのがなくなってしまう。短期間。私なんかも30代の時に家を買って、23年間ローンの奴隷だったが、今はもうローンもない。子育ても終わって。気楽なものです。NS事務局から10~12万。NPOを金もうけに使って、と時々勘違いの罵倒されることもあるが、それで充分よ。引きこもりの親を見ていると、あいかわらず生活苦で。実は、4~500万位は平気で出せる蓄えはあるのだけど、それでもお金に追われているという意識をもっている。それはあるが、どこかで生活のパラダイムシフトをしていけば、経済回復なんて必要なくなっていくのではないかと。実際には貧乏人たちが景気回復とか、株価が上がったら喜んだり、とんでもないことをしている。

>最近、日経新聞も成長、成長と言っている。この期に及んで。

未来社会のイメージはそこまでは見えないが、少なくとも元引きこもりにとってはそういう社会には適応できないだろうなという、そういうイメージはある。

>そうすると、希望、欲望という問題の内容をどうしていくか。企業の発展などが希望だった親の世代とは違って。

いわば私的所有を前提とした目標達成ではない、社会参加、社会建設というものを、コモンセンスにしていくか。ただし我々の世代のように単なる理念的なものではなく、そのこと自体が快適であり、気持ちがいい。そうでないあと続かない。半農半Xも頭の中ではわかるが。

>なかなかしがらみから抜けられない。そのしがらみから抜けていく場をコモンズでつくるといえることですかね。

そうですね。ある意味でイメージだけは、カフェコモンズという、スローワークの

実験場をつくったときから、持ってきたはずなんだけど、その現実的な形成過程というのが意外と難しい。

>5年10年単にでしか進まないということかな。

そういう風に考えれば納得はできるが、あまりにもさびしいなど。その意味では10年やってきたから、簡単にはできないというのが分かったというだけだな。

>まあなんだかんだいって5年前に協同組合ということをして、今やっとできてきそうな状態になってきている。

それを曲がりなりにも創ったということは言えるだろうね。

## 後記

『誰も切らない、分けない経済——時代を変える社会的企業』（同時代社、2100円）は無事出版の運びとなりました。予約購読80万円も集まり、本屋での売れ行き次第では増刷することになっています。増刷の際には再度、一口1万円の予約購読の募集をする予定です。福田衣里子議員の推薦の帯もあり、売れるのではないかと期待しています。未入手の方はぜひ書店にてお求め下さい。

社会的企業促進の活動はいよいよ法制化を射程に入れたものとなります。それを考慮して、「個人化した時代の、新しい貧困の当事者としての若者」というテーマで調査を実施しようと考えています。これは多分聞き取りやアンケートという方法では不十分で、一つの社会運動的な広がりを持ったものとして組み立てる必要があると思っています。社会的に不利な立場の人々の中に新しい貧困の当事者としての若者を組みこくことが狙いです。

西嶋さんの聞き取りの最後の部分で、協同組合の話が出てきますが、スローワーク協会では、カフェコモンズを新たに障害者自立支援法の就労継続支援A型の事業所として利用する計画です。この事業をイタリアの社会協同組合B型をモデルに協同組合方式で運営しようと考えています。そのための出資金集めが今始まっています。5年前の種まきがやっと芽を出してきたという感じです。経過についてはいずれ報告します。

いま、ギデンズの第三の道を読んでいます。『第三の道』（日本経済評論社）『第三の道とその批判』（晃洋書房）の二冊ですが、後者で展開されている批判への反論はなかなか面白かったです。ベックの個人化論、宮本太郎の今回のノート、それに山田昌弘『ワーキングプア時代』（文芸春秋）などが面白かったのですが、この種の議論の日本での最初のものと思われる宮本みち子『若者が（社会的弱者）に転落する』（洋泉社）もなかなか良くできたものでした。調査と同時にこれらの著作についての勉強会を進めていくことも必要かと思っています。